



TITLE:

ジェームス・ミルと新マルサス主義

AUTHOR(S):

岡崎, 文規

CITATION:

岡崎, 文規. ジェームス・ミルと新マルサス主義. 経済論叢 1925, 21(1): 125-135

ISSUE DATE:

1925-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128295>

RIGHT:

(禁轉載)

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷一十二第

行發日一月七年四十正大

論叢

國債利子及官吏俸給の免稅……………法學博士 神戸 正雄

自殺統計論……………法學博士 財部 靜治

米價と關稅との關係に就て……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

商品堆積の理論……………經濟學士 谷口 吉彦

インフレーションの意義并に標準に就て……………經濟學士 小川福太郎

マクスの絶對地代と價值法則……………經濟學士 八木芳之助

雜錄

パンタレオニ氏業績の回顧……………經濟學士 松岡 孝兒

ジエムス・新マルサス主義……………經濟學士 岡崎 文規

統計拾穗抄……………法學博士 財部 靜治

京都帝國大學經濟學會大會記事

法令

大正十四年國勢調查施行令・失業統計調查令・船檢舶查規定中ノ改正

ジェームス・ミルと新

マルサス主義

岡崎 文規

新マルサス主義の沿革を論ずる者の中には、先づ James Mill を擧げて、この主義の最初の唱道者であつたとする者がある¹⁾。その理由とする所は、一八一八年に彼が Encyclopedia Britannica に於て、Colony を言ふ條項の下で新マル

サス主義に關する意見を述べてゐて、之が新マルサス主義に關する意見の中で、最も古きものであると言ふに在る。彼が新マルサス主義者であつたことを立證するために、いつも引用される彼の著書がもう一つある。それは一八二一年に刊行せられた Elements of Political Economy であつて、その勞賃論中に新マルサス主義の思想が発見せられると言ふのである。乍併、これ等の論者は何れも James Mill の片言隻語を用するに止り、深く彼の思想の根本を探究し、之を説明したものではない。然るに他方に於ては、新マルサス主義者としては James Mill を全く度外視してゐる者がある²⁾。新マルサス主義者として彼を度外視する者は、それが何故であるかと言ふ理由を少しも説明しないから、その眞意は付度する由もない、恐らくはこの一派の研究家も、彼に Colony 其他の論著があることを知らなかつたのではなく、それ等に現はれたる思想は、新マルサス主義との關係に於て之を見る時は、殆んど問題にするに足らないもので

- 1) Robinson, V., Pioneers of Birth Control. 1919. p. 18.
Usser, Neo-Malthusianism. 1897. p. 7.
Ferdy, Künstliche Beschränkung der Kinderzahl. 1897. S. 52.
- 2) 例へば Stopes, Early days of Birth Control. 1922.

あると考へたのであつたらう。しかし、上に示した彼の諸論著には、少なくとも人口に關する意見のあることは明らかである、また James Mill が當時に於ける最も過激なる社會改良家の一人にして、新マルサス主義に關する貴重なる文獻 Illustrations and Proofs of the Principle of Population 1822 の著述を以て聞えたる Francis Place と臨終に至るまで、親交を續けてゐたと言ふ事實もある、更に James Mill が九人の子澤山であつたことに就て、J. S. Mill が其著 Autobiography の中で、「新聞雜誌に執筆すると言ふ不安定な收入の道を除いては、他に之と言ふ資源もない境遇にありながら、父が結婚して、しかも子澤山であつたと言ふ事は、義務の問題としても、思慮分別の問題としても、父の力説した意見と相反すること斯くの如く甚しきはよもや有り得まい」と言つてゐる、此等の事實を綜合して考へて見ると、James Mill には人口に關しては勿論のこと、新マルサス主義に關しても、何等かの意見があつていゝ筈だと思は

れる。今、假に新マルサス主義に關して彼に何等かの意見があつたとしても、それが Robinson が重要視したほど、新マルサス主義の沿革上に重要な價值を持つてゐるものであるか、或は全く度外視し去つてよい程の價值しかないものであるかは尙ほ一段の研究を必要とする。この小篇の目的はこの問題を探究するに在る。それに就て何よりも肝腎な事は、彼の人口に關する文獻としては如何なるものがあるかを明らかに知る事である。かう言ふ目的に役立つ手引としては Bain の James Mill, 1882 の右に出るものは恐らくないであらう。何故ならばこの著書は James Mill の私的生活を知る上に於て貴重である許りではなく、彼が一管の筆に托してなしたる思想生活の全面をも鮮かに記述して餘す所がないからである。詳しく言ふならば、彼が著書として如何なるものを刊行したか、定期刊行雜誌等には如何なる論文を寄稿したか、學會に於ては如何なる意見を主張したかと言ふやうなことが知り得られるからである。それで Bain

- 3) Bain, James Mill, 1882, p. 77.
Dictionary of National Biography, vol. 15, p. 1277.
Wallis, Life of Francis Place, 1898, pp. 65-92.
- 4) 石田、今泉兩氏共譯、ミル自叙傳、第四、五頁、(原本手元にないので譯本による)

に従つて、James Mill の人口に關する意見及び論著に如何なるものがあるかを調べて見やう。

一八二〇年に James Mill は Ricardo 達の Political Economy Club を組織して、彼や Ricardo の私宅に會員が會合して、しばしば、經濟に關する諸問題を討論したのであつた。Bain は、その俱樂部の初期の會員達は Mill が Malthus の議論に對して猛烈なる反對論を主張したのをよく記憶してゐる、と書いてゐるから、彼が人口論に關してはマルサスと反對の意見を支持してゐたと言ふ事は容易に知り得られる。然し彼が如何なる點に於て如何なる反對説を述べたかと言ふことに就いては何等の記録もないから、その當時の會員でなければ詳細のことは解らない。其他、彼が定期刊行雜誌等、例へば Anti-Jacobin Review, Edinburgh Review, British Review, Westminster Review, Annual Review, Philanthropist 等に掲げた幾多の論叢の中で、重要なものは、何れも其の論題と其の概要は知り得るのであるが、それ等の論叢の中で、特に

人口を論じたものは見當らないやうである。されば彼の人口に關する意見は矢張り、一八一八年に Encyclopedia Britannica に於て書かれた Colony 及び一八二二年に刊行せられ、二六年に第三版を重ねた Elements of Political Economy に依つて之を探究する外はない。それで私は、これから、この二個の論著に基いて、新マルサス主義に關する彼の意見を窺ひ、それは新マルサス主義の沿革上から見ても、重要視する可き價值を有つてゐるものであるか、或は全く度外視し去らる可き程のものであるかを探究し度い。

この Colony は彼が Encyclopedia Britannica に書いた七個の論文の一つである。Colony は序論に於て植民の意義を説明し、本論は二節に分れてゐて、第一節が人口との關係に於て植民を論じたるもの、第二節が領土との關係に於て植民を論じたるものである。こゝで問題となる部分は第一節である。その中に次のやうな文句がある。「人口の増加を阻止する最良の手段は何であるかと言ふ事は、政治家及び道徳家が智慧

- 5) ibid. p. 199.
其他、Encyclopedia Britannica の James Mill の項にも同様のことが書いてある。
- 6) この七個の論文は 1816 年から 1823 年に亘つて書かれたもので、1. Government. 2. Jurisprudence. 3. Liberty of the Press. 4. Prisons and Prison Discipline. 5. Colony. 6. Law of Nations. 7. Education 等より成つてゐる。この内最も有名なものは Government である。これ等七個の論文は Essays として刊行されてゐる。

を擯らなければならぬ最も重要な實際問題である。所が、從來は、不幸な事には、この問題を取扱はなければならぬ人々が何れもこれを回避してゐたのである。しかし、育兒の迷信が除去され、功利の主義が確立されるならば、問題は容易に解決されやう。そして惡徳の最も甚しい源の一つを枯渇せしむる手段が発見されよう⁷⁾と言ふのである。この文句だけを讀む者は誰しも彼が立派な産兒調節論者であつたと判斷するに躊躇しないであらう。これは Robinson の如きも、James Mill が新マルサス主義の父であつたと言ふ彼の意見を證據立てるために、この文句を引用してゐる⁸⁾。しかし、彼がこの論文で直に新マルサス主義を提唱したものでかどうかは、全體の論旨を見た上でなければ言へないと思ふ。彼の意見の概要はかうである。彼の觀察した所によれば、古代ギリシアの植民政策は過剰人口を緩和するために行はれたものであつたが、當時、彼の時代に於ける英國の植民政策は犯罪人を追放するために行はれたものであ

る⁹⁾。一體、社會に貧乏人が増加すると言ふことは、食物の増加以上に人口が増加することに專ら原因する。何故ならば、この場合には勞賃は必然的に下落し、之と同時に生活標準も降らざるを得ないからである。生活が悲慘になると犯罪は白から増加する。しかし、普通は、勞賃の下落、犯罪の増加と言ふ現象が発生しても、それはそれ丈のこととして考へられ、その根本原因は人口の過剰にあると言ふことは痛感せられないものである。これは近世歐洲に於ては何れの國でもさうであつた。それで犯罪者さへ追放すれば社會は安全であると考へて、英國でも斯くの如き植民政策を採つたのである。然るに之に引き替へて、古代ギリシアでは人口の過剰は——人口の過剰と言ふのは人口の絶對數に就て言ふのではなく、食料との關係に於て相對的に定まるものであると彼は特に注意してゐる¹⁰⁾——もつと直接的に鋭敏に感知せられる。と言ふ譯は、古代ギリシアでは勞賃と言ふものがなく、食料も生活のために購買されるのではなく、

7) Essays (Reprinted from the Supplement to Encyclopaedia Britannica) on Colony. p. 12—17.

8) Ibid. p. 18.

9) on colony. p. 14.

10) Ibid. p. 7.

貴族達が奴隷を抱へてゐて、その奴隷を産業に使用するのであるから、收獲が減少するか、人口が急に増加すれば、直ちに人口の過剰が切々と感ぜられるのである。

英國が犯罪者を追放して植民させる政策を採つてゐるが、それは極めて其の場合あたりの治療法である。犯罪者を英國から追放することによつて、英國はその犯罪者の危険からは安全であり得るかも知れないが、犯罪發生の根源を退治しようとするのではないから、その政策は決して根本的のものではない。犯罪の源は貧乏にある。貧乏の源は人口過剰にある。この過剰人口を制限することこそ社會を眞に安全にし、幸福にする第一の方策である。さればこそ前に引用した文句の如くに、如何なる手段によれば、人口の過剰が最も有効に制限せられるか、政治家乃至道德家の最も重要な實際問題となるのである。之を解決する方法は種々あるであらうが、植民地は犯罪人を追放する土地であると言ふとか、善良なる國民は母國に於てのみ生活す

べく、植民地に出かけることを恥辱であると言ふやうな思想を捨て、そして大局から見て社會全體の幸福を招來せしめなければならぬと言ふ概念を把持するならば、貧困、犯罪等に對する社會的不安は根本的に解決され得る。それには過剰人口を植民さすと言ふことは有効な解決策はないと彼は主張するのである。勿論、彼は人口制限の手段として産兒調節法のあることを知らなかつたのではないかも知れないが、現在、既に存在してゐる貧困、犯罪、及び其の原因である人口の過剰を緩和する手段としては、犯罪人の追放と言ふ姑息の手段を弄することを廢して、國民的植民を行ふ可きことを主張したのであつた。それで本論文に於ては、彼の議論は新マルサス主義に一言も及んでゐないと私は信ずる。Robinson 達は、自分達の意見に都合のよい文句のみを引用して、彼の議論の眞意を曲解してゐるのである。彼等が引用した文句の次に「こゝで回答を要する唯一の問題は植民の問題である。」と明らかに述べてゐる彼の言葉を

全く見逃してゐるのである。この言葉だけにでも注意を拂ふならば、彼の意見を斯くも曲解する譯には行かない筈である。植民政策も新マルサス主義も人口問題に密接なる關係を有つてゐる點に於ては一つであるが、其の態度に至つては氷炭相容れないほどに相違してゐると思ふ。植民政策に於ては人口の繁殖は自然のまゝに委せ、過剰を來せる人口を植民によつて處分しようとするものであり、新マルサス主義は人口の過剰そのものを防止しようとするものである。

(新マルサス主義の目的は人口の過剰を防止しようとする以外にも、優生學上の問題及びヘドニズムの問題が附隨してゐることは後段に於て説明する。)されば植民政策論に於て、新マルサス主義に關する意見が少しも述べられてゐないと言ふことは、極めて當然のことであつて、こゝでそれが述べられてゐたならば、却つて奇妙であるさへ考へられる。それで要する處、James Mill は、Colony に於ては、何等新マルサス主義に關して彼の意見を述べてゐない

と私は斷定する。

次の問題は Elements of Political Economy である。本書は Ricardo の Political Economy. 1816 が出版されてから六年目の一八二一年に第一版が刊行されたのであつた。Ricardo の著作、其の他、經濟學の論著は何れも初學者には難解であつたので、これは、彼が其の息子 J. S. Mill に經濟學に就て講義をして聞かせたノートが基になつて出來たものである。又、J. S. Mill は「初め書かれた時分には甚だ有用な書物であつたが、今では既にその用を果してしまつてゐる「經濟學綱要」を除いては、父の著書は何れもまだ永い間全然無用に歸する事は無く云々」と述べてゐて、Elements of Political Economy は學問的價值は極めて乏しいものであるかも知れないが、私は進歩せる今日の經濟學論と Elements of Political Economy の學問的價值を比較しようとしてゐるのではなくして、當時に於ける彼の人口、殊に新マルサス主義に關する意見を探究しようとするにあるから、本書が初めて書か

12) 石田、今泉兩氏共譯、ミル自叙傳、第三十九、四十頁、
13) 第二百九十頁、

れた時分と變らない重要な意義を有つてゐる。

Francis Place の Illustrations and Proofs of the Principle of Population が出版されたのは一八二二年のことであるから、Elements of Political Economy に新マルサス主義に關する事項が記述されてゐるとすれば、Francis Place に一年を先んじてゐることになり、彼は矢張新マルサス主義の父と稱せられ得るに足るであらう。

私は不幸にして、其の第一版をどうしても手に入れることが出来なかつた。それで一八二六年の第三版による外はないのである。しかし、都合のよいことには、第三版の序文によれば、第三版が第一版と相違してゐる點は、第二章分配論中の第三節利潤、第三章交換論中の第二節第三節のみであつて、こゝで問題となる第二章分配論中の第二節勞賃は第一版の分と殆んど同一であることである。彼の人口に關する意見はこの勞賃論に於て發見することが出来る。其の概要は大體、左の如きものである。

進歩せる社會では、勞働者と資本家とは別個

雜錄 ジェームス・ミルと新マルサス主義

の人間である。それで勞賃率は要する處、この兩者間の需給關係に従つて決定される。即ち資本量が一定で、勞働量が増加すれば勞賃は下落し、勞働量が一定で、資本量が増加すれば勞賃は騰貴するのである。人口の増加に比較して、資本の増加が及ばない傾向が永續するならば、勞働者は次第に貧困に陥り、その程度に應じて不幸と惡徳とが増加することは避け難い所である。それから彼は Malthus と同一の獨斷に基いて、——Malthus の獨斷を無條件で繼承したと言ふ方が適切であるかも知れない——資本増加の傾向は人口増加の傾向に遙かに及ばないと言つてゐる¹⁴⁾。そして人口の増加と資本の増加とを同一速度に維持するためには、どうしても人爲的手段が必要となつて来る。人爲的手段としては二つの方法が考へられる。其の一つは資本の増加を、その自然的速度以上に早めて、人口の増加の速度と平行させることである。其の二は人口の増加を制限して、その速度を資本の増加の速度まで引き下げることである。法律を以

14) Malthus が斯くの如き命題を獨斷的に打ち立てたものであることについては河上博士「マルサス人口論要領」經濟論叢第二卷第五號に詳し。

て、之を強制的に遂行するための主なる方便は、その目的に順應する者に賞與を贈り、その目的に違背する者を罰するのである。例へば子供少なき者に賞與を贈り、子供多き者を罰する如き之である。しかし、産兒調節の方法を教へずして、斯くの如き賞罰を行ふは不當であると同時に、斯くの如き強制手段を採つたからと言つて、爲政者が希望するが如き効果を納め得ないことは言ふ迄もない。次に資本を増加せしむる強制的手段としては先づ、節約を奨励し、奢侈を禁止することである。これは強制的手段が巧妙に行はれさへすれば相當の効果を擧げることが出来る。其他の強制的手段としては、年々の生産額の一部分を資本に繰入れしめ、之を生産に使用せしむるにある。斯くの如き手段によつて、資本の増加は求め得られるかも知れないが、人口は生活資料に増加すれば、何時でも増加する傾向を持つてゐるから、資本の増加を計することは、結局の處、人口の増加を一層烈しくするに止り、何等の改良も行はれたことにな

らない。人類が幸福であるためには、生産の効果が最も有利であることを必要とする。生産の効果が最も有利であるためには、人口の密度を制限して、その生産に要する勞働力を提供し得る限度に止めることを必要とする。

James Mill は以上の如くに論じ、最後に、人類の幸福は、強制的手段によつて、資本を人口と同一速度に増加させることでは、得られるものでないこと、及び人口の過剰は人類の幸福を減殺するものであることを認めるならば、こゝで實際上の重要問題は、出產兒數を制限する方法 (the means of limiting the number of births) を發見することである。¹⁵⁾と結論してゐる。彼を以て新マルサス主義者であると主張する者は、好んでこの最後の文句を引用する。¹⁶⁾この「出產兒數を制限する方法」と言ふ文句も、見方によつては婚姻を延期することによる制限であると解釋する事も出来る。二十歳で結婚した女よりは三十歳で結婚した女の方が懷妊期間が短かく、彼の計算法に従つて、二年間に平均一人の子供

15) *ibid.* p. 65.

16) Robinson, *ibid.* p. 19.

Edgeworth, James Mill (Palgrave's Dictionary of Political Economy. vol. V, p. 755)

17) *ibid.* p. 49.

を出産すると假定すれば、前者に比較して後者は出産兒數を五人だけ制限したことにならう。しかし斯くの如く解釋する時は、Malthus の道德的抑制と何等選ぶ所がなくなつて仕舞ふ。彼は人口論に於て、Malthus に對する大反對論者であつたことは既に述べた所である。そして彼の人口論の前提に於ては、Malthus の人口論の前提を其のまゝ繼承してゐる事に就いても既に述べた。彼が其の結論に於ても Malthus に従うと言ふことは有り得ない。若し結論に於ても Malthus と意見を同じくするならば、彼は何れの點に於ても Malthus に對する反對者であり得ないことになる。彼が人口論の前提に於て Malthus と同一見解を取つたと言ふことは争ふ餘地のない事實である。しかば彼の結論が Malthus のそれと相違してゐるに違ひないと言ふ推定を下さざるを得ない。されば彼がこゝで「出産兒を制限する方法」と言つたのは、所謂道德的抑制ではなくして、「人工的制限の方法」の意味であると解するのが至當であらう。人口を

人爲的に制限する方法として Malthus は唯一つ道德的抑制のみを挙げ、結婚すれば子供を生む外はないと考へてゐたやうに解釋してゐる人もあるやうであるが、Malthus でも道德的抑制の他に、人工的制限のあることは知つてゐたと私は思ふ。例へば彼自身の言葉に「私は常に、特に、人口制限の如何なる人工的及び不自然の方法も排斥する云々」と言つてゐるのを見ても、それを知ることが出来やう。人口の人工的制限が、必然の要求から、各個人の間に行はれつゝあつたことは、世界何れの國に於ても極めて古い歴史をもつてゐるが、只 Malthus にあつては、人口政策として、人口を人爲的に制限する場合には、道德的抑制のみを奨励すべく、人工的制限は排斥すべきものであることを主張したのである。反之、James Mill は人口政策として、人口の人爲的制限には人工的制限法を選ぶ可きことを提唱したのであつた。それ故に Malthus の思想を舊マルサス主義と言ふならば、James Mill の思想は正に新マルサス主義で

18) On Population, 5th, ed. vol. III. p. 393.

19) Stopes. Contraception, chap. 9. pp. 242—263.

ある。かう言ふ意味に於て彼は最初の新マルサス主義者であつたと言ふことは認め得られるであらう。しかし、今日行はれてゐる新マルサス主義の理論と實際は、過剰人口の制限を必要とする場合のみのもではなく、優生學上及びヘドニズムと密接なる關係を有つてゐるものであるから、彼の新マルサス主義なるものは、新マルサス主義のある一面に限られてゐることを特に注意して置く必要がある。

彼は出產數を制限する手段として、人口の人工的制限法を提唱したが、しからば如何にして之を實行すべきかに就ては一言も述べてゐない。これを新マルサス主義としては片手落であると言はなければならない。舊マルサス主義は特殊の技能を要せずして、其の實行が可能であるけれども、新マルサス主義では、その主義を是認することゝ、その手段を實行することゝは各別に存在する。如何にその主義を是認しても、その實行方法を知らなければ、結果のみから見る時は、新マルサス主義を否認するに等し

く、其の存在の意義がなくなつて仕舞ふ。従つてその實行方法を教へない新マルサス主義は、新マルサス主義としては極めて幼稚なものであると言はなければならない。確かに、近時、新マルサス主義が異常の勢力を以て進展し來たつたのは、その宣傳に大いに努めてゐる結果と、又一方ではこれを迎へ入れる準備が熟してゐることにも原因してゐるだらうが、最近科學的知識の大いなる發達に伴ひ、その實行方法の進歩に負ふ所も亦大であると考へられる。彼の時代には、今日の如き、簡易な實行方法は發見されてゐなかつた。彼も斯くの如き實行手段を知り得やう筈がなかつた。さればこそ、彼は彼の力説した自分の意見に相反して、産兒制限を大いに必要とする境遇にありながら九人もの父となつて仕舞つたのであつた。

そこで James Mill は新マルサス主義者であるかと言ふ問に對する私の答はかうである。彼が過剰人口を制限する方法として、道德的抑制に依らず、人工的制限法に依る可きことを提唱

した點に於て、最初の新マルサス主義者であると言ふことが出来る。彼の理論は過剰人口に對する人口政策に基礎を置いてゐるものであつて、今日、優生學及びヘドニズムの上に立つてゐるやうな新マルサス主義とは全然その趣を異にしてゐる。然るに彼が人工的制限の實行手段に就て一言も論及しなかつた點のみに即して言ふならば、新マルサス主義の宣傳者又は實際運動家達から、彼が度外視されても、それは已むを得ないことゝしなければならぬであらう。
